

障がい者と健常者をつなぐレクリエーションゲームの開発と汎用化



鹿児島聾学校
教諭 山之内 幹

1 はじめに

どんなに障がいや病気が重くて体が思い通りに動かなくても、みんなと一緒にスポーツやレクリエーションを楽しみたい願っている人はいるだろう。そして、多くのスポーツやレクリエーションでその願いが叶えられたら、あるいはそういった新しいスポーツやゲームが開発されたら、それらの人々の生活にちょっとした楽しみが生まれ、生き甲斐になってくるのではないだろうか。

筆者は、特別支援学校で平成 20 年より重度重複障がい児の自発な運動を促す教具の開発に取り組んできた(2014)。また、これらの教育実践の研究の延長として、平成 23 年から今日まで生徒が身体的な制限をあまり感じることなく楽しめるスポーツやゲームの開発に取り組んできた。

以下に紹介するボードベースボール、ドーナツゲーム、フロアリバーシ、コロコロゲームは教師と生徒が休み時間や授業中に試行錯誤しながら開発したアダプテッド・スポーツまたはレクリエーションゲームである。

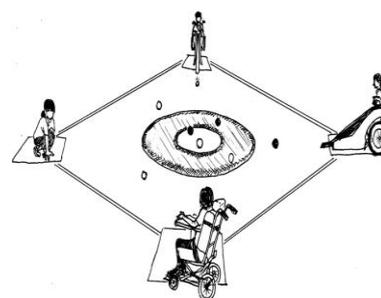


2 ボードベースボール

内外野においてある大小のボードに打球

(カラーボール)が当たればヒット。緑は1塁打、黄は2塁打、青は3塁打、赤は本塁打。野手は投手の他 2~3 名。内野は投手のみ。車いすの守備者は、ゴロであれノーバウンドであれ打球を車いすや体に当てたらアウト。歩行可能な者はフラフープ内(片足が内側にあれば可)から手持ちのラケット(テニスやバドミントン)に打球を当てたらアウト。車いすの打者は捕手ネットの輪内(直径 60 cm)にボールが入ればストライク。立位の打者は四角の枠内(縦横 80 cm)にボールが入ればストライク。投手は自身の実態に応じてボールを投げてもよいし、傾斜板で転がしてもよい。

3 ドーナツゲーム



中央にドーナツの形をした紙を置く。ドーナツの外径 3 m、内径は 1 m。各チーム

は囲み(一辺 5mの栈木)の角に位置し、木球をを転がす。木球は各チーム大(10~12cm)が1個、小(直径6~8cm)を5個準備する。木球が無い場合はソフトボールやバレーボール等を用いてもよい。木球は1投ずる時計回りで転がす。木球をドーナツ上に多くのせたチームが勝ちである。

4 フロアリバーシ



2種類の色（青と赤）の正方形のマット（1m×1m）を各2枚準備し交互

に並べる。各チーム、マットの両側に位置し、ボール（ボッチャ球がおすすめ）を投げる、または転がす。ボールが静止したますが自チームのますとなり自チームのこまを置く。各チーム交互に9回投げる。4投目と7～9投目の内1投（選択できる）がアタックチャンスとなり、相手チームが既に獲得しているますも狙える。相手のますにボールを乗せたら自チームのますになる。ますを多く獲得したチームが勝ちとなる。

5 コロコロゲーム



的に向かって、木球を傾斜板で転がし、倒すゲームである。的は子どもが好

きなキャラクターを自分で板に描き、糸鋸で切り取り、着色して作ってある。的は大きさにより1点、2点と点数が付けてある。ポイント制で競い、的を倒したら点数が入る。

6 おわりに

ボードベースボールは個々の間に生じる身体的な制限を少なくすることによって障がい者と健常者が対等に戦い、共に楽しむことを目的にして作ったスポーツである。一方、ドーナツゲームは個々の身体的な制限をそのまま受け入れ、障がい者と健常者の協働によって試合を行うことができるゲームになった。またフロアリバーシは最後まで結果がどうなるかわからないドキドキ感を味わえるゲームである。さらにコロコロゲームは木球で的を倒すだけというゲームである。

これらは障がいの有無や年齢に関わらず多くの方が一緒に楽しめるスポーツである。特別支援学校だけでなく、特別支援学校と小・中・高等学校との交流学习や、福祉施設や病院等でも試してみることを提案したい。

最後に卒業間近の高等部の生徒の保護者が「先生方がこのようなスポーツを作り、子どもにさせていただいたことに感謝しています。娘が以前、地域の小学校に在籍していた時は体育は見学ばかりでした。中学生になりこの学校にきて、家で子どもが『楽しかったよ体育』とボードベースボールの話をするのですよ」と話してくれた。今後もさらなるスポーツやレクリエーションゲームの開発に取り組み、実践していくつもりである。

文献

山之内幹(2014)：特別支援教育における教育実践の研究 ～指導記録の書き方と生かし方～，批評社，東京．105－141．